米国のドル政策とトランプ発言

いよいよ来た。おしゃべり好きの新大統領がついにドルに関するコメントを出した。市場は待っていた。ドルは高すぎて米国の競争力がそがれている、ということだ。それでドルは全般的に売られた。

ただあくまでも中国に対する文脈の中だ。トランプの頭の中は対中国が第一で為替は二の次だ。それでも為替を意識したことには意味がある。

米国の通貨政策は、クリントン政権のルービン財務長官が強いドルが国益と明示して以降、歴代の政権は強いドルを支持してきた。

だが従来の枠組みや考え方に否定的なトランプ新大統領が強いドル政策を放棄しても不思議ではない。その可能性はある。

トランプの新政権の目玉である減税やインフラ投資で財政が拡大することから長期金利が上昇し、ドル高につながる一方で、経常収支の赤字を削減してバランスさせることを目指す。そこにはトランプを支持した低中所得階層の白人労働者たちがいる。

矛盾する政策の結果を繕うためにトランプがドル高を攻撃してもおかしくはない。減税やインフラ投資でドル高に振れる市場をけん制するためだ。

その中国の習近平は昨日ダボス会議で講演したが、まるで少し前の米国大統領の講演のようだった。グローバライゼーションを擁護し、自由貿易の重要性を説いた。他国の犠牲の上に自国の利益を追及するべきではない、とまで言った。

習近平の中国とトランプの米国はまるで正反対の道を目指しているようだが、一つ共通点がある。それは両者とも従来の世界の枠組みを変える意思を持っていることだ。習近平は西側主導の戦後の国際体制の中で中国をはじめとする新興国の影響力の拡大を目指す。一方トランプは従来の国際体制とは異なるシステムの構築を狙っているようだ。

いずれにせよ歴史的な変革期に市場が大きく変動するのはつきものだ。ポンドも昨日は大幅に上昇してショートポジションは締め上げられたが、いかにもポンドらしい相場と言える。４００ポイントも上昇するときにショートを維持することはできない。となればストップをどこに置くか。ロングに変えたポジションをどこまで引っ張るかなど、リスクマネージメントの力量が問われる。

ポンドもドルもまだ始まったばかりだ。